72の高貴な下衆達の狂騒曲

HaiTo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
７２の高貴な下衆達の狂騒曲

【Ｎコード】
Ｎ４８８６Ｚ

【作者名】
ＨａｉＴｏ

【あらすじ】
悪魔の力を使役する者と、狂ったように欲望を体現する悪魔との物語。　終わることのない闘争の一つの物語。　一章分書き溜めしてごそっと投下。一章分書き溜めしてごそっと投下。これを繰り返していきたいと思います。　精神衛生上宜しくない描写が多々含まれています。ご注意ください。

00．仮設

少女は怯えていた。それは自分に対してであり目の前で倒れている人間に向かってでもあったし、初めて見る初めて感じ、初めて得た感覚に。初めて初めて初めて初めて初めて彼女は人を殺した。

なぜだろう、なぜ彼は私の後ろをついてきて私の肩に手をおいて私の唇を胸を服を髪に手で触って扱いて汚してなんで私をなんで私に私が私の初めて初めてを彼が彼が？　この肉が？　私を？　え？　誰が、誰を？

そうして少女は悲鳴にも似た『産声』をあげて、夜の世界へと消えた。

同じ時間、少女が青年を『侵した』その瞬間、少女が住む世界の都市にそびえる時計塔の先端で意味を測りかねる微笑を蓄えた人型が在った。その人型はゆっくりあるはずのない眼をあけ、闇を背景に異様な眼光を、確かに少女が走るその路地へと向けていた。

「おめでとう。同胞の生誕に私になせる最大の祝辞を、そして汝が在った世界へ向けて『さようなら』を共に贈ろう。さあともに狂気を踊ろう。一人でカンプグルッペと成れよう。それだけの意味が在るのだから。ともに狂騒曲を奏でようではないか。プロジット！」

そうして男は両手を広げ歌を歌う。　少女は怯えていた。それは自分に対してであり目の前で倒れている人間に向かってでも

01. 胎動

第一次世界大戦がドイツ等の敗北という形で収束し、ヴェルサイユ体制となった西欧には束の間の平和が訪れていた。世界最悪の戦争が終結したことで、彼らは本当に戦争が醜いものだと悟っていたし、確かにもう二度と繰り返さないと心に決めたはずだ。

だが、そんなことを全く考えない人間もいる。その一人が彼だった。目覚めと共に自室の窓を開け、湿った部屋の空気を入れ替える。英国の”夜”の湿った空気が相も変わらず彼の部屋を循環する。結局湿りっ気は取れないが、そんなことを気にする彼でも無かった。

部屋のドアを叩く音がする、男は「良い」と言い客人を招き入れる。そこに立っていたのは漆黒のメイド服を纏った幼さが抜け切れない女。

ひざ下まであるメイド衣装も黒。伏せがちになっている瞳の色も黒く、伸びた髪も闇よりも深い黒だった。

女性が伏せていた顔をあげて問う。

「おはようございますご主人様。紅茶を淹れましたが飲まれますか？」

男は一言「いただこう」と手を伸ばすと、部屋の外においてあったのだろう給仕台よりティーカップを主人の近くの机へ置き、そうして陶器のポットよりゆっくりと紅茶を淹れる。

夜の英国に相応しい”綻び”に満ちた香りが部屋を包み込む。男は香りを少し楽しむと、一口だけ喉に流し、うむと頷きまたゆっくりと机に戻した。

「して、招待状があると？」

「はい。こちらがそれにございます」

主人が問うと幾分も入れず答え、さっと先ほど郵便受けより持

ってきたであろう便箋を渡す。そして差し出し元など見ないまま男はさっと蝋で固められた封を指でなぞる。封は何事も無いように剥がれ、中の縁取られた羊皮紙が現れた。

「――ふん。俺を呼ぶかよアレが。おいシオン。車を出せ。今はあの男へ会いにいくぞ」

「かしこまりましたご主人様」

シオンと呼ばれたメイドは身体を引き、部屋の外へと暫時とせず消えていった。残った男は残った紅茶をゆっくりと飲み干し、封筒をくず入れに投げ入れる。そうして部屋を後にし廊下へと歩みだす。

小さな装飾された廊下というトンネルをホールの方へと進み階段を降りるとそこには既にシオンが外套を腕に抱え佇んでいた。ゆっくりとした動作で階段を降りると、メイドが男の横へ立った。

「シオン。今年の西暦を言ってみろ」

「１９２８年でございます」

ふん。と鼻で笑う男。メイドが外套を肩に掛けながら答え、彼女の主人がさらに言葉を紡ぐ。

「終戦から２０年か。まだ傷が痛むかシオン」

「いえ、そのようなことはありません。ご主人様に救われ私の傷は癒えました」

男は、そうか。と一言吐き捨てた後外套の胸ポケットにあった手袋を嵌める。そうして扉を両手で開けると目の前には車が止まっていた。シオンが前に出てその扉をゆっくりと開けると、男は何も言わずに座る。

「よし。それでは行け」

シオンが運転席に乗り込んだのを確認し、男は手を振り合図す

る。承知しました、とシオンがアクセルを踏むとロールスロイス社の高級車はその屈強なエンジンを駆動させ、彼らを運んでいった。

「おお。デレクよく来てくれた」
「あぁめんどくさすぎたがな。今宵は暇だったのでな」
深夜五時。時計塔を仰ぎ見るウェストミンスターブリッジで二人の男と一人のメイドが闇に沈んでいた。一人は確かにメイドの主人、今デレクと呼ばれた彼だった。もう一人は深々と帽子をかぶり、ざっくばらんに切られた髪の毛が広がっている中年の男。

「少し仕事が立て込んでな。おまえも既に分かってるだろうがまた『産まれた』からな」
中年の男は安物のタバコにマッチをすり、火をつけながら言葉を続ける。

「それでだ。これまためんどいんだが……」
「言うなめんどくさい。分かっているし理解もしている。あれは面白いな。なんだ男を侵すのか。ふふんシオンどう思う」
「どうと言われましても」
メイドは伏目がちなまま佇み、鞄を手に持ったまま答える。

「おまえのところのメイドは可愛い――いや、なんでもない。やめろ。シオンさんすまんって」
静かにメイドが男の背後へと忍び寄って何かを突き出してた。

「おいおいシオン止めておけ。こんな男を殺してもお前が汚れるだけだ。俺の手を煩わせたいか？」
デレクの言葉を聞くか聞かないかの時で既にシオンはデレクの後ろへと移動していた。

「帰ったら俺の部屋に来いシオン。それでだアイヴァン。それで”それ”はこちらで処理して構わないのか？」
はい。と短く返すシオンを傍目に、アイヴァンと呼んだ男が加えているタバコをデレクが白い軌跡を描きながら川へ落ちるように叩く。おおうっとアイヴァンが驚きバツが悪そうに一歩の退くと、あーっと口を尖らせ。

「あぁ。被害がなくなるのなら別にそのあとは任せる。死体が出たらこちらに連絡してくれればそういった処理はこちらでやろう。報酬はいつもどおり結果報酬で？」
構わない、それではまた何かあったら連絡するよ。とデレクは踵を返すとシオンは深く身体を傾けた後、同様に身体を反転させ主人の後についた。

「なぁシオン。正直どう思うのだ？　おまえは誰かを殺したいと思うか？」
車の扉をシオンに開けさせ、自身は後部座席に腰を下ろしメイドが運転席に座ったのを見計らない、その主人が問う。

「正直に申してもよろしいのでしょうか」
「良いと言ったぞ」
「はい。とてもとてもとても殺したい人間が居ます。ご主人様以外のすべての人を」
車のアクセルを踏み、まだ深夜の有象無象が闊歩する夜を進む車内でシオンの黒い瞳が世界を貫くように輝く。街灯も全く無く、整備されつくした道ではないが車は直進しカーブでは美しい曲線を描いている。

「傷は癒えていないのだな――止めろ」

シオンは普段止めるようにブレーキを入れる。止まれと言ったときは最大努力をするよう務めている。ややあって車が止まるとデレクは自らドアを開け放つ。

「ご主人様」「いや、良い。そこで座っていろ生きていろ」

彼はシオンを静止させると、アパートメントとアパートメントの狭間の路地に目をやる。数分だろうか数秒だろうか、長い時間が流れたようにシオンには感じられた。何より主が外に出ているのに自らが”動けない状況”故にだ。

「……つまらないな。貴様の狂気はその程度か？　顔を見せたまえ。孤独の柱よ」

瞬間、シオンが揺れた。叫べない。許されていないのだから為せるはずはないが、彼女はそれでも外に出ようともがいた。主を一人、かのソロモン王大いなる鍵、その柱の名を取る化物に対峙させる訳にはいかないと。

主の盾となり剣となり露払いをするのが自身の役目だと、そしてそれを為せるだけの力があるという自負が彼女を突き動かしていた。

そうしてデレクは足を大地で鳴らす、と同時に大きな閃光が彼へと突貫してくるが、突如として発現した淡い光によって紡がれた装飾楯によって停止する。弾丸と楯とが激突し、大気がわずかに悲鳴を上げる。

「ははは。シオン、俺のギアスを破れぬようではまだ俺の前で剣になろうとは思わないことだ。して孤独の柱よ。いつまでそこで我の世界を侵そうとしているのだ」

もう一度デレクが足を鳴らす。刹那も経たずに弾丸が大地へと落下する。弾丸の正体はまさしく小さな女。先日、新たに産まれた狂気だと断定して間違いないだろう。

「ぐぎあ、侵すッ殺す！」
大地に見えない何かによって叩きつけられている少女が、両手両足を地面に突きたて立ち上がろうとする。デレクは少しだけ持ち上げられた少女の顔をチラとみると膝を折り、手を伸ばす。そして少女の首を掴み軽々と持ち上げてしまう。
手足を暴れさせるがデレクへは何故か届かない。そうして力を込め――。

「――さて、これを持って帰ろうか」
意識を強制的に飛ばし、デレクが後部座席へと少女を投げ入れ、本人はシオンの隣のドアを開け中に座る。

「ッご主人様！」
「落ち着けシオン、いいから車を出せ」
言葉をこらえ、苦い顔を必死に隠しシオンは車をすすめる。デレクはぼうっと外のやや夜が霞がかっているのを見ながら、目を閉じた。

02．絞首

「おはよう孤独の柱よ。良い朝だな」

朝かどうかなど彼女にはわからない。なぜならそこは窓など無い場所だったのだし、あるのは扉と通気口程度。

叫ぶことなど無駄なのだろうと少女は悟る。この部屋はあまりにも血で満ちていると。狂気へ触れてしまったがために、今彼女自身がそう呼ばれているように、柱へと果ててしまった為に得た力だが、それが余計彼女を傷つける。

そして目の前の人間が何よりも恐ろしかった。金色の髪に美しい蒼の瞳が何よりも、この世のものではない力を発しているように思えた。外套は既に後ろのメイドが腕に抱えていた。礼服のように華美ではないがスラリとしたラインを浮き出す服を着ている男は、一歩少女に向かって進む。

「――殺し足りないか？　まぁ何よりもまず名前だ。私はデレクだ狂気の使徒よ。おまえの名は？」

狂気の使徒と呼ばれた少女はゆっくりと口を開き、ツバをデレクに吹きつける。もちろん彼には届かずに途中で静止し床に落ちたのだが、デレクは笑を浮かべ、やがては腹を抱えて笑った。

「あはははは！　よろしい！　よろしい！　さあシオン今日の訓練が決まったぞ。こいつを殺せ。

だが、だが面白くない。おい狂気の。この目の前の女を殺すことが出来たのなら、そうだな。こいつの代わりに雇ってやろう。死にたくはないだろう？」

「……本当だな」

「良い。さあやれ」

かつかつとデレクにより外套を渡すシオン。それを受け取り何事も無かったかのように広い部屋の端へとゆっくりとすすむ。しばらくして壁際の椅子に座ると、デレクは指を鳴らす。すると少女を捕られていた鎖が一気に解け落下する。

そうして産まれた金属音が開始の合図となり、両者が激突する。

シオンは前もって持参してきた極東のカタナと呼ばれる片刃の剣を袈裟に振り下ろすが、使徒はそれを沈み込むことで回避。その勢いを利用し足払いを仕掛けるが果たしてシオンはすでに後方へと飛び退いていた。が、それを地面を踏み鳴らし追いすがる少女。

「ハッ」

空中で刀を横薙ぎに振るい突進を牽制するシオン。だが高さが足りない。突進はシオンの腹部へと右腕を突き刺す結果となり床へと落ちる。シオンの背から狂気の腕が生える奇妙な光景が産まれた。

「アガァ」

シオンが苦痛に顔を歪める。一瞬全身が萎縮するのを狂気は見逃さなかった。刺した手を抜き放ち、そのまま刀を持つ手を握りしめ目一杯つぶす。狂気がシオンの骨を砕く、鈍い音が室内へと響きわたり追ってシオンの絶叫がデレクの脳内を満たす。

彼が恍惚の表情をしているのを雌二匹は知る由も無かったが。狂気はその表情を崩さぬままゆっくりと立ち上がり、シオンの抉った腹を踏み砕き、絶命へと導く。彼女は叫ぶ。

「侵す！　侵す！　アハハハ！」

使徒たる少女が狂気の片鱗を見せた瞬間、彼女の腕が飛んでいた。死んだはずの人間の、壊れたはずの腕が動き、少女の関節部を狙い美しい剣閃を描きながら腕を断ったのだ。狂悦していた狂気の使徒はその叫びを悲鳴へと変え声を上げる。

「ありがとうと言っておきましょうか狂気。貴方が私を壊してくれたおかげで私は本物へと成る」
床を転げまわる狂気を傍目にゆっくりと立ち上がるシオン。腹にあったはずの穴は既にもう無く、砕かれたはずの骨も異常はない。唯一傷らしい傷は閉じられた両目から流れる鮮血だった。
彼女の全身にこびりついた血が微かに発光し、服の内側へと消えていった。微かに見える肌には血によって描かれた魔術陣が発光している様が見え、首あたりまですべてが魔術陣で覆われていることが伺える。と同時に少女の腕からの出血は止まり『美しい』断面だけがありありと残る。

「私は孤独な柱『シャックス』。私はただ一人の大いなる力にして主へとこの身を捧げる一つの狂気。名を朝倉紫音。柱により与えられた役目と力によってお前を滅ぼす」
「彼女は私の拾った柱でね。どうだろう。狂気の。彼女の血となってくれないか」
満面の笑みを浮かべながら紫音に歩み寄るデレク。両手は広げられ世界のすべてを見下すような、そんな笑顔で狂気の使徒たる片腕がない少女を視る。

「さあ狂気よ。おまえの耳を口を言葉を世界を頂いていこう」
紫音が使徒へと歩み寄り、痙攣しているその少女の首を掴む。妖美な笑を浮かべながら小さな身体を持ち上げ、大胆に唇を奪う。

「――ッ」
狂気は訳もわからずただもがく。卑猥な水音が小さく響く。首を掴んでいない方の手で少女の股間へと手を伸ばす紫音。そこは痙攣とともに排出されていた尿で濡れていた。

「ッはぁ」

紫音が口に糸をひかせながら顔を手を離す。未だに閉じられた目からは僅かにだが血は流れ続けているが全く気にする様子はない。べたりと床に落とされた少女は意識が朦朧としうつらうつらしていた。

「残念。あなた柱じゃないのね。ただの狂気の成れの果て。フロウイクス。ふふふ……ご主人様、どうしましょう？」

腰を浮かせながらデレクへ身体を寄せながら妖々しく尋ねる紫音。彼の腰から股間へとその華奢な手を伸ばすが、デレクはそれを止めてその手で紫音の顎をくいと上げる。

「お前が食べたいのか？　己の心を晒せ」

顎に当てた手をそのままに親指を紫音の口へとねじ込む。

「んはぁ……ちゅぁ……んっあ」

嬌声を上げながらデレクの指を舐め回す紫音。顔をこれでもかというほど赤らめたメイドは自らの股間へと手をゆっくりと動かすが、デレクによって阻まれる。少し驚きながらも舐め続けるがやがて主人は手を引く。

「はぁ……はぁ、この娘を、私は食べたいです犯して犯して見だして食べて全部壊して全部食べたいですが――」

自慰をすることも許されず主人のモノを触ることも許されなかったメイドは何かを欲しそうに手足を小刻みに揺らす。

「――それよりもご主人様に虐めて欲しいですご主人様に満たして欲しいですご主人様で私のすべてを、私に全てを、私を私にしてください！」

「よろしい。実によろしい誠によろしい。よって狂気。バドゥ・アドグ・リオンティネ」

デレクが紫音の瞳から流れ続ける血をさらい空中へ文様を描く。血が滞空し発光する。紋様が明らかに恣意的な形へと収束し一度赤く大きく輝くと血の紋様は空間へ溶けていった。

そうして未だ死ぬことも出来ず荒い息を上げている少女の下よりゆっくりと処刑台がせりでてくる。ちょうど少女の首の位置が固定されギロチンの刃が天井に発現する。

ややあって狭く暗い部屋には不釣合いなしっかりとした作りの斬首台が出来上がる。自分が置かれている状況を少女が認め、もはや抵抗する力も残っていないのか小さく泣き出す。

「ひくっ……怖いよう……お兄ちゃん助けてよう」

「だが死ね。まさしく死ね。悲しみに満ちたまま死ね。それではさようならの時間だ」

身を翻して部屋の出口へと歩くデレク。その後ろを恍惚とした表情でついていく紫音。ドアが空きそうしてゆっくりと扉の外へ二人が消え、扉が閉じられ。

そうして刃が何に阻まれるわけでもなく落ちて――

03．始動

英国は昼を迎えていた。午後の到来を告げる鐘がなるとほぼ同時にデレクは目を再び覚ます。傍らには紫音が至福の表情で寝ているが意に介すこともなくベッドから降りる。

そうして部屋の中心のソファーへ深々と身体を預けると指をクイと曲げる仕草をする。すると本棚より一冊の本がひとりでに滑り出て彼の手の中に収まる。

紫音が起きる頃には既に煤けた黄色で空は塗りつぶされていた。デレクは慌てふためく紫音を特別咎めることもなく、ただただ書へ目を侍らせ薄い紙を捲り次のページへと進む。ただそれだけのことを黙々と続ける。

「申し訳ございませんご主人様。何かお持ちしましょうか」

ではコーヒーを。と返すと紫音は恭しく部屋の外へ出ていった。デレクはふと何か些細な事を思い出したかの様に顔を上げると本を閉じ、手のソレを机に緩やかに置いた。すっと髪を掻き上げながら立ち上がると窓の外へ視線を投げた。

「……主催者、か」

ロンドン郊外よりはるか薄らに映る街並みを目を細めて凝視する。その状態のまま扉を叩く紫音を迎え入れ、黒々とした液体を注がれたカップを本の隣に置かせる。

「紫音。今日はワインを夕食の時に出そう。銘はおまえに任せる。飲みたい奴を出してこい」

デレクは視線を窓から紫音へと移し、背筋を伸ばし立っていた彼女の頭の上へ手を伸ばし軽く叩く。紫音は顔を輝かせ、承知しましたと言葉を紡ぐ。

そうして嬉々として夕食の準備をするために部屋の外へ出ていった紫音を最後まで見届け、男は窓にゆっくりと歩み寄る。一歩進むごとに表情は険しくなるが構わずに進みいよいよ窓枠に手をかけようとした瞬間、窓の外に漆黒の影が現れた。それに驚くこともなくデレクは窓を開け放つ。

「ようこそ主催者。死ね」

窓を開け啖呵を切るがはて何かするわけでもなくその影を睨む。

「喜べ英国唯一のカウサリサ。今年は貴様の年になるだろう。ロシアや極東、アメリカのカウサリサは間に合わない。よって貴様が殺すか手にするか、はたまた別の可能性か。なんせよ貴様と共に分かち合おうではないか。デレク・カウサリサ・ホーベル」

影は人型だった。だが口も手も何も無いはずだがたしかに影は笑っていたし腕でハットを抑えていた。

「それでは今宵は是非観覧をと思い足を運んだのだが、ふむとてもそのように友好的ではないようだ。悲しいかな。それではまた――」

そうして見えないはずの笑みを浮かべながら空へと溶けていった影を見届けて、デレクは歯ぎしりしながら窓を閉じる。

――――

「紳士淑女諸君！　ようやく、いよいよ産まれるのだ！　去年は儚くも1月に生誕し2日で死んでしまった為、都合二年近く柱が居ない悲劇の世界であった。

だが、だ。そんなことは些細な事をであろう！」

再び時計塔の先端に影が両手を広げ、聴衆など居ない黒黒とした空間に向けて熱弁を振るっていた。

「それでは今年に産まれる柱はアロセス。さて如何様にして楽しませてくれることだろうか？　だが、きっと、楽しませてくれることだろうよ」

同時刻、夜の闇がグレートブリテン島を覆い隠し暫く時が流れ、日付を変えようかというその時に。デレクと紫音はテラスにて果実酒をゆっくりと楽しんでいた。

「――紫音、感じるか？」

「えぇ、産まれるようですね」

血よりも赤い液体を香りを楽しみながら口へ含む男と、追って小さな口で少しずつワインを飲み下す女が、示し合わせたかのように遥か遠くを仰ぎ見る、だが実際には霧で見えることはない時計塔へと視線を投げる。

「今年は楽しませてくれるだろうか。だがま、きっと楽しませてくれるだろうよ」

男がグラスに再び赤を注ぎ空に捧げるように腕を持ち上げる。女もそれに倣い杯を持ち上げ先端を合わせるように持ち上げる。

「えぇ。きっと、ご主人様を満足させるような柱であるでしょう。故にその生誕に――」

時計塔の男が応える。

「故、その生誕にこの身を焦がすような祝杯を、賛美歌を、この世全ての祝福を以って、ザンホゥル！」

「――乾杯」

デレクと紫音は杯を合わせ、男は消失した。

０４．欺瞞

彼は焦っていた。リスプとしてのプライドと人間としての尊厳とを天秤にかけ、その書を手に取り疾駆した。そこまでは良かった。だが気がつくと彼はその本をどこかに落とし、失ってしまっていた。アレは無くしてはならないものだ。リスプとして修行を開始したのは二十年前。カウサリサという言葉を知ったのは十年前。師を屠ったのはつい先ほどだ。その全ての時間と自らが掛けてきた時間の結晶になるはずだった、アレを、彼は命を掛けて手にするべきだと自負していたしそう望んでいた。

だからだろう。彼は逃げていたし焦っていた。アレは無くしてはならない。その一心で。

「はひぃ、くそ。どこに行ったんだ！」

走り、逃げてきた道を引き返しながら周囲へ目を向け、右へ左へと地面を舐めるように塀の上を手に取る様に。だが無い。見つからないどこへ行ってしまったんだどこにあるのだ、どこにどこへどこで。

「あぁ……無い。無い！　無い！　どこだ！」

そうして彼は逃げてきた書庫についてしまった。一時間も立たないうちに師の残した書を盗む為にきた書庫館。あぁなぜだろう既にここまで来てしまったということは――

「どこへ、行った……どこだ！　どこだ！」

静かな夜に一つの喧騒が産まれる。周囲にちらほらと人が集まるが彼はそれを気にすることはない。あぁどこへどこにどこをどこが。彼は叫び続ける。

「どこへ行ってしまったんだ私の――」
そうして彼は止まった。周囲のわずかながら集まっていた野次馬も突如として訪れた静寂に淀むが、一人、中心の男がゆっくりとした動作で歩き始めると、それを拒む者もなく道が開かれる。

「私の、狂気を、喰らえ」
男は一人その呪いを口にし続ける。途切れることのないその言葉。世界を自己を全てを呪うかのような呪い。あぁなぜだろう。運が悪くか運が良くか、その日は主催者が上機嫌であったその日が運命の分別、全てを変える力が満ちていた星の下であった。

「では君を認めよう。汝＞なれ＜の狂気を認めよう魔術師＞リスプ＜・アシュビッツァよ。君は序列５２柱となりアロセスの業を背負い、この世界へ産まれるのだ」
どこからとなく、意味もなく、主催者が微笑む。その微笑の言葉だけが男の中で響く。その言葉はとても甘く、首筋を這われるように纏わりつき、何よりも正しく素晴らしいことに聞こえた。ならばこそ彼はその言葉に身を任せた。
そうして狂気が誕生した。そして今度こそ本当に、それは柱の業を背負い存在すべてを掛けて柱らしく生きるべきだ。生きるべきだし生きなくてはならない。それが彼の生きる意味となったのだから。

05．天蓋

デレクは朝の微睡みの中、うつらうつらと本の紙を捲っていた。それでも確かに言葉の意味は取れているがその意味を考えてはいない。ふと横に視線を投げると薄らと湯気を立てている紅茶が置かれていることに気がつく。

「俺も衰えたか？　気を抜きすぎたか。ともかくありがとう紫音」

後ろに侍っていた女への言葉を本に向かったまま紡ぎ、引き続き本へ意識を落とす。ただその時間だけが過ぎていく。時折置かれたカップを傾け喉に流し込み、再び視線を落とす。

「……紫音、思うのだが俺のギアス破れるだろ？」

「いえまさか、ご主人様のギアスは私には解呪できません。私は貴方様の血を飲んだのですから」

デレクに内在されている柱、シェトリーの業により彼の血を自らの意思で飲み下したモノは、彼に謀反を働くことは出来ぬ身体となる。

「だがお前も柱の一つだ。ギアスを打ち破れる力がはるはずだ」

口の端をあげながらデレクが小さく笑う。返答に困った紫音は一歩二歩と退き、苦い顔をしたまま部屋を後にする。

「おっと。虐めすぎてしまったか」

くくくと笑いながら残った紅茶を飲むこともせず、紫音を追って部屋を出る。

「紫音！　出るぞ。ついてこい」

返事を待つこともなく男は脚を外へ向ける。ふと思い出したよ

うに付け加えた。

「車は良い。せっかくの招待だ。暇を持て余すのも良いが、行くとするぞ」

小さな足音を立てながら主の後ろに歩み寄る紫音。小さくかしこまりました、と答えどこからか持ってきた長い鞄を両手に抱えながら共に進む。

デレクは振り返ることもなく正面玄関を開け放ち外に出る。すこし立ち止まりに紫音が鍵を閉める音を確認し、空を見上げた。

――荒れるな。

そう思い、薄手の上着なのを思い出したように触るが、次には横に紫音が外套を準備しているのを見ることになる。彼は関心したように手でソレを奪い、声を上げるメイドの言葉を無視して自分で羽織る。

「助かる。では行こう」

「あっ、いえ勿体無いお言葉でございます。はい！」

――

「おお君か。よく来てくれた。まだ晩餐会には早いが盟友たる君がわざわざ訪問してくれたのだ。受け入れないわけがない」

盟友、そう思っているのは彼だけかもしれないな。そうデレクは思ってはいたが口にだすことはなかった。男によって彼とその従者が屋敷へ招かれれる。デレクが私兵に阻まれていたのだが騒ぎを怪しんだ屋敷の主人が様子を見に来たところ、友人だということで私兵をなだめたのだった。

「すまないな。招待状をどこかに置いたのを忘れてしまった」

デレクはこれといって詫びる様子も無く苦笑いを浮かべ、外套

を紫音に渡す。

「はっはっは。君らしいではないか。学友だった頃から相変わらずだなデレク」

紫音は『学友』という言葉に反応したように顔を少し男へ向けるが、次の瞬間には主人の後ろ姿へ視線を戻した。

「そうかな。まぁ君も相変わらずで頼もしいよアシュリー」

アシュリーと呼ばれた男はこれまた口を大きく開け笑い、我が物顔で廊下を歩く。いや、確かにこの廊下は彼のものではあるのだが。

「あぁそうだ。客間をひとつ貸してはくれぬか。幾分昼には弱くてな」

おお、やはり以前と変わらぬようだな。とアシュリーは豪快に言い放ち回れ右を急に行うと、後ろには彼のメイドが佇んでいた。

「彼らに一つ部屋を与えてくれ」

メイドはかしこまりました。と淡々と答えるとデレク達へ腰を折り、こちらです。と彼らを導くように前を歩き出す。

「それではまた宴で飲み明かそうぞ！」

「あぁ、それまではまた」

メイドに導かれながら後ろ手に一刻の別れをデレクは告げる。やや歩き階段を六本の脚が鳴らし、そうしてまた再び少し歩くと、メイドが鍵を何時ぞやから手にし、部屋の扉を開ける。

「こちらでございます。お時間になればまたお呼びしますのでそれまでおくつろぎ下さい」

デレクはありがたく使わせていただくよ。と答えながら部屋に

入り、紫音は名前も分からぬメイドと視線を交わした後、主人の後を追って入室する。アシュリーのメイドがゆっくりと扉をしめる音が部屋を僅かに震わせた後、静寂が訪れる。
デレクは華美な装飾をあしらった机を前に顔を歪め、ため息をひとつついたあとソファーへ深々と座り、目を閉じる。

「……何か気になったか、紫音」
デレクの後ろに侍る紫音へ言葉を投げかける。彼女はあまりにも突然の質問に驚きながらも、はい。とだけ言葉を紡ぐ。

「言うがいい。この醜悪な部屋や醜悪な香りを吸うよりは、お前の声を聞いていたほうが癒されるというものだ」
さらっと口にした言葉が紫音の耳を鳴らす。先ほど気になった事を忘れかける程衝撃を受けるが己の身体を強く抱きしめ、堪える。

「アシュリー様がご主人様の学友だと言うところに違和感を感じまして」
「様は要らん。アレに敬意を払う必要は皆無だ。そうだな、長く暇だろうからな。まず紅茶を用意してから大学の話をしてやろう」
紫音は部屋の端に備えられた給仕台に歩み寄り、蝋に火をかけ湯を沸かし始める。それを傍目に見ながらデレクはなぜこんな話をしようとしたのかを考えるが、彼の中で答えは出なかった。

「紅茶が入りました」
暫くして紫音が二人分の紅茶を用意すると、デレクは一口喉に通し手でメイドを自分の横に招く。嬉々として、だが顔には必死に出さないように静かに座る。
隣に座った紫音の腰へ手を回し柔らかな女性の身体を抱き寄せながら、男は口を開く。

「さて、どこから話そうか。大学でアレと出会った時あたりがいいか？」
「あ……あの、アシュリーの話は要りません。ご主人様が学生であった頃の話をお願いします」
あきれたように男がメイドの顔を見るが、紫音の顔は既に悦楽に浸っているように呆けていた。デレクはそうだなあと言いながら更に女を抱き寄せながら、ゆっくりと言の葉を紡ぐ。
「大学といっても、俺は優秀な学生では無かったからな、つまらぬかもしれぬがそれも良いだろう」

06．未知

「例えばだ、プロフェッサーの手を折ることが出来たのならどれほどの学生から英雄と讃えられ、どれだけの学生から卑劣漢を見る目で見られるか。それが重要なのだ」

学外へ数名で出て、コーヒーの香りが空気を濁し天井に備え付けられたサーキュレーターが回ることで、葉巻やパイプの煙を切る、そんな喫茶店らしい喫茶店へと逃げていた。

プロフェッサー、まぁつまり教授のことだがアイツらは例外なく頭がおかしいのではないかと思っていたよ。なにせ自分が識っていることは学生は殆ど識っている、として話すんだ。とてもじゃないがアイツらの言を理解できるなんて思わなかったね。

「だとしてもだアシュリー。あいつらはたぶん腕をなくしても口でペンを持って論文を書き続けるぞ」

友だった者の一人がそう言うのを、俺もアシュリーも笑っていたな。なるほど確かにそうだろう。アイツらの論文への狂気というか執着心は計り知れないものがあった。それは正しいのかもしれないが、一人の不良学生にとっては奇怪な衝動に思えたよ。

「おいデレク。何か案は無いのか」

そうそう。この時期はまだ俺はカウサリサとしての継承はしていなかった。だから魔術を持て余してはいた。そんな時期だったからだろう、俺は妙なことを考えてしまった。

「そうだな。案が無いわけではないが……一つ、任せてみてはもらえないだろうか」

師父から言われる度に自尊心が傷ついていた。お前の魔術の腕は五代続いたカウサリサ・ホーベルの中では貧弱も貧弱、何もなせ

ないだろう。と。
確かに俺の魔術は師父には遠く及ばず、同時期の他家のリスプと比べても誇れるようなものでもなった。むしろ彼らから卑下されていたのではないかとも思う。だがカウサリサとしての立場が俺を守っていた。もはや母は子を孕める身体ではなかったからな。俺を産む為に魔術的な改造を施し、柱との同調性に重きを置いた子を産むための装置と化した『アレ』は人間では無かったから。
故、ホーベル家は俺しか跡取りは居なかったし、カウサリサは身内のみで受け継がれていかなくてはならない秘儀であった。
柱を内に取り込み、内在する柱――悪魔――の力を行使するなど、リスプからしたら異端であり畏敬の存在だ。己と世界をつなげ万物を成そうとするリスプは、そういった世界以外との接続を嫌うし、何よりも悪魔は『門』を守護する害悪で打倒すべき存在だからだ。

「ほう。君が提示する案はいつも成功し最善手と思える結果をもたらしてきた。ならばこそ今回も君に任せよう。まあアイツらの伸びきった鼻を挫いてやるだけでいいんだ」
「ん、任された」
残ったコーヒーを飲み、先に店を出ると大学へ向けて足をすすめることにしてな。どうせなら今すぐにでもやってやろうと。だからこそあんなことになったのだが。
研究室へ向かう最中、長い廊下を響かせるのは俺の足音だけ。のはずだったが、プロフェッサーの部屋の区画へ踏み入れた時、別の音が混じった。
なんだとね。肉と肉をすりあわせたような、聞いたこともないような音。音に導かれるように一歩ずつ前へ進む。あの頃の俺には分からなかったが、今なら解るね。あれは肉を咀嚼する音だ。しかも生きたモノをそのまま食いちぎる。
訳もわからず進む。導かれる。そんな感覚。いよいよ音の震源

地へと迫る。もはや明瞭に聞こえてくるその音は俺を奮い立たせていた。プロフェッサーが鎮座しているはずの部屋の中より聞こえてくる音は、初めて俺を満たしていた。

「あの、教授……？」

小さく声をかける。が、返事はない。当たり前だ。既に俺にも理解できていた。食われているのはきっとあの男だろうと。だが誰に？　どうして？　そんなことばかり駆けめぐる。

音を立てぬようにドアを引く。微かに音を上げるがそれよりも咀嚼する音のほうがはるかに大きい。ゆっくり、ゆっくりだ。そうして身体を部屋の中へとねじ込む。そこにはこの世の天国が広がっていた。

「ハッ……ンガッ、ンッ――」

女が、何かを食べている。室内は天井にぶら下がった電球により本を読むことも出来るほどの明るさだ。しかし何故か室内は黒黒としたモノに覆われていた。

血。そう理解できた。

プロフェッサーの白髪まじりの金色の髪も。跡形もなく血で汚れていた。その身体の上で嬉々として人の体を貪る女。

「アグッ……ングッ。ハッハッ」

服を着ることも無くただ目の前の肉を血を骨をしゃぶり、啜り、頬張る女の姿はとても人間には見えなかっただろう。だが俺はな。その姿に生まれてはじめて人間の姿を見た。

生きている。教授は今まぎれもなく生きている。死にかけている。腕を食われている。喉を吐血したその液体でせき止めている。だらこそ、アレは生きている。そう感じたんだ。

そうして人を食らう女もまた生を謳歌している。そうだ。誰も言わなかった。

殺すな、奪うな。ただ2つ。人を喰らうななどと誰が説いただろうか。誰も説かなかったし誰も理解しようとしていなかったのだ。誰も教えたくなかったのだ。

命が奪われる瞬間、それこそが命の最も輝く瞬間だと。

命を奪う瞬間、それこそが命が最も燃え盛る瞬間だと。

そうして俺はお前に巡りあった。アサクラシオン。序列四四柱。シャックスの柱を背負いし咎人よ。

07. 闘争

「お前との出会いはこんなところか」
「あの、恥ずかしいのですが……」
デレクは口端に笑みを浮かべ、さもありなん。と軽く口を開くと続けざまに言葉を紡ぐ。

「だがな？　紛れも無くお前は俺を目覚めさせたし、その点においては本当に感謝しているのだ。っと、だが全く意味のない話になってしまったな。他に何か聞きたいことはあるか？」
そうですね、と紫音が思案していると部屋のドアが叩かれる。小気味良い音がデレクの鼓膜を揺らす。メイドが顔をあげすぐさまドアへと足を向けて扉を押し開ける。

「晩餐会の準備が整いました。まだ時間はありますがよろしければ一階エントランスへお越しください」
「はい。わざわざありがとうございます」
では、と伝言を伝えにきたメイドは伏目がちに退き、扉をゆっくりと閉めた。

「だ、そうですが、どうしますか？」
回れ右をして振り返った先にデレクがいるのを知っていたかのように紫音が問う。男は驚く様子もなく、行くぞ。と顎をあげて外に向かうようにメイドへ指示する。

「はい」
そう間髪いれずに返答をしたメイドは屋敷から持ってきていた長い鞄を再び両手で抱き、主人の後を追って部屋を出た。
後に残った紅茶がゆっくりと冷め、室内の香りを塗り替えてい

くのに時間はかからなかった。

「この度は我がアシュリー・インテグラルが二七へ成るに辺り、この様な晩餐会を開かせて頂いた。各人忙しい中の参加本当に嬉しく思う。それでは私に変わり我が友、デレク・ホーベルが乾杯の音頭を任せる」

屋敷の中庭を豪勢に飾る装飾や、有象無象が立ち並ぶ丸テーブルが立ち並ぶ事で見る者が見れば地獄とも取れる世界が埋めていた。

人間の大半はこの光景を美しいだとか豪華だとか妬ましいだとか思うのだろうな、そうデレクは思いながらアシュリーと変わり一段高い壇上へと上がる。

何十という人間の双眸が、金色の髪を持った静謐な雰囲気を携えた男へ向けられる。その中には妊婦も混じっているのを見るが、関係の無いことであった。

「大学時代の学友、アシュリーの生誕日へと巡り会えたことは誠に嬉しいことだ。これからも彼のますますの健闘を健康をここに折り付け――襲撃だ紫音！」

デレクは突然言葉を打ち切り、離れた所で佇んでいた紫音へと駆け寄る。他の人間は全く反応することは出来ずに突如とした彼の変異に驚くだけ。メイドは鞄を地面に叩きつけ、上蓋を蹴り上げていた。刹那、影が中庭の中央へ落ちる。

「ＧＨＹＥＥＥＥＥＥＥＥＥ」

人ならざる声を影があげる。そして周囲の人間がその影を認める前に、一人の男の首が中空へ爆ぜていた。

影が無茶苦茶に編んだ魔術構成を『男の首』がある空間で創り上げたのだ。もちろんその魔術は発動することもなく無へと消え失

せるが、その時に放たれた魔力によって首が飛んだのだ。
それを見たデレクは――他の人間はすぐ叫び逃げようとしたが――簡単な自己断界魔術を組み上げ展開する。

「紫音、貴様は自分で何とかしろ。飛ばされるぞ」
言われるまでもなく紫音は鞄から刀を取り出し、自分の手首を小さく切り上げて血を流す。中空へ鮮血を投げ、魔術陣を中空へ描くことによってデレクのような直接の魔術干渉を防ぐ魔術を発動させる。

「ＪＷＲＲＲＲＲＲ」
影が再び叫びを上げる。意味を全く取れないその叫びが、逃げ惑う人々を一層恐怖に駆り立てる。が、人間たちは逃げようとして中庭の果てで、見えない壁にぶつかってしまう。

「どういうことだ。この広域に断界だと……柱だと思って間違いないだろうな」
「私が先行します。ご主人様は周囲の安全確保を」
既に手首の血は止まった紫音が、刀を両手にデレクの前へ歩み出る。アシュリーなどが腰を抜かしているのを男は見ると、仕方ないなと肩をすくめると彼らの下へ歩みを進める。それだけを確認して紫音は影へと向き直り睨む。
既に周囲の人間は『壁際』へと集まっており、目の前で繰り広げられるであろう事態へ恐怖していた。
影はよく見ると男の様な姿をしていたが、あまりにも醜い容姿であった。腕は捻れ曲がり、全身は裂傷に覆われ、肉体のありとあらゆる所が欠損、あるいは負傷している。
着衣は何も無かった。脚の付根から生殖器がだらりと垂れていることによって初めてその個体が男であることが、彼らには理解できた。

男は動くこと無く紫音と対峙する。その動きは全く乱れることもなく呼吸さえしてないのではと思わせる程であった。

「五二柱、アロセス……殺す！」

紫音が大地を踏み鳴らし神速の振り下ろしを男へと繰り出す。男は刀が振り下ろされる直線の軌道より、半身身体を引くことで回避する。

「シッ」

紫音は振り抜く刀を翻し、袈裟に切り上げようとする。回避は間に合わない一瞬の攻防であるが刃は男に届かずに、またもや出鱈目に編まれた魔術構成によって防がれる。

メイドは『刀を防げる程に超密度の魔力の塊』たる構成を一瞥すると、すぐさま飛び退く。次に一秒と経たず構成が爆散する。

爆発の破壊力は数メートル後退していた紫音の身体を打ち、更に後退を強いる。顔を覆った腕を下げる頃には彼女の胸の前に再び意味を持たない構成が編まれているのを見ることになる。

「――あ」

そして爆裂した魔力の塊は紫音の右胸を抉り、身体を吹き飛ばす。メイドの上半身の服は全て吹き飛び、残った箇所も黒黒とした血で塗り替えられていく。元あった小さな双丘は今や見る影もなく片方だけになり、抉られた肉より血とも内蔵ともとれるモノが永遠と流れ出していた。

「い、や――」

さすがにシャックスの柱といえど、心臓を破られては蘇生することは出来ない。肺を片方潰され残った肺や内蔵も爆裂した衝撃で砕けた骨が全身を突き刺していた。自らの身体によって内部より串刺しにされ、それでもまだ息があること自体奇跡であった。

「まだ死ねぬよお前は」
だが走り寄ったデレクが息を引き取ろうとしていた紫音の右胸で手をかざし、その柱の名を告げる。
「我が柱フェイニクスへ告げる。朝倉紫音へ我が内包する命を与えよ」
小さく手より産まれた炎が、残った紫音の身体へと落ちると燃え盛る業火へと変貌を遂げる。デレクは気にすることはなく紫音へ腕を掲げたままの姿で炎へと身を投じる。
「ＧＱＵＵＵ」
炎へと魔術構成を展開しようと影が叫び声を上げるが、フェイニクスによって編まれた焔柱へ侵入することは叶わずに霧散する。変わって周囲へ構成を紡ぎ、解き放った爆裂もその豪炎の勢いを減衰することは出来なかった。
取り残された人々もいよいよ天へ貫こうかとするその火炎に見とれていたが、しかしそれが収束し始めるのを感じていた。
「起きろ。そして殺し殺されろ。それが貴様の成すべき事だ紫音」
焔が消え去った後には閉じた両目より血を流した全裸のメイドが、刀を手にし立っていた。全身には血によって描かれた文様が輝き、見るもの全てを魅了する様なその幼さの残る肉体に妖美な雰囲気を与えていた。
デレクが続ける。
「そして命令する――喰らえ」

08．昼食

「そして命令する――喰らえ」

メイドが咆哮する。大地を裂くような、高い高い金切り声。それに呼応するかのように影も人ならざる叫びをあげ、幾つもの魔力の塊を紫音の周囲へ展開する、が女は手に持った刀を一閃しその構成を霧散させる。

ここにきて初めて影がたじろぐ。焔柱にしろ所詮再び屠れば良いと思っていたのだろう、だが復活した女は先ほど瞬殺した同一個体とは思えなかった。

取り残された人間の数名が意識を失った。あまりの恐ろしさに。先まで、害悪などでは無いと信じられていた一人のメイドが、突如として現れた影を超えた、狂いに狂った存在だというのを肌で感じた為だ。

そう。もちろんアロセスとして柱の業を背負った男も狂いきっていた。が、紫音は違う。

狂うために狂った。ただその目的は一つ。目の前の対象を――

「喰らう」

一言。その一言が引き金となりメイドだった女が大地を疾駆する。疾駆という話ですら無かった。女の姿が消えると同時に微動だにしない男の後ろで爆音がする。

外周へ退避していた人間の四肢が吹き飛ぶ。そこには人間を千切ったシオンの姿があった。

中心の男の腕が落ちる。シオンがデレクの元より一足で駆け反対側へ突進し、その途中で刀を持っていたということだけで、ただそれだけで人が幾人も死に、男の腕と無関係な命が爆ぜる。

黒き男が唖然としている間、紫音は肉体を失った人間の頭を掴

み、刀を持ったまま眼球を抉り出し舌で舐めながら頬張った。
柔らかな音が空間を支配し、飲み下す音に至っては中庭全てに響き渡ったのではないかと思わせる程。

「んは……美味しい。もっと、食べたい」
再び絶叫が世界を支配した。男への恐怖ではない。人を喰らい人を殺す化物に対しての拒絶と恐怖だ。
だが閉じられた世界で彼女から逃げることは出来ない。身を翻し腰を抜かしていた女の首元へ刀を突き立てるとそのまま振り上げ、頭部を両断する。倒れかけた女の半身を抱き寄せ、半分に割れた脳を愉悦の表情で啜り、打ち捨てる。
口の周りについた『何か』を手で拭い、次の食事へと向かう。がそれを止める様に目の前に魔術構成が編まれる、が再び彼女は刀を以ってして両断する。
そのまま刀を中心で動かない男へ投げる。一瞬、音速を超えて振るわれた刀が飛来するのを回避することはままならず、胸へ深々と突き刺さる。
そして詰め寄っていたシオンが突き刺さったまま柄を持って、大地へと深々と突き刺し男を固定する。

「そこで見てろということだよアロセス」
いつの間にかデレクが男の隣で立っているのに、黒い男は気がつく。魔術構成を組もうとするがすぐさま霧散してしまう。

「私は三柱内包していてね。一つは先程みてもらっただろう？一つはお前には意味が無い。もう一つはヴァルファーレと言ってね。俺の周りに魔術を展開してみろ。すぐさま魔力を盗んでやろう」
デレクは何時になく上機嫌な様子で男へ己のことを語る。

「シオンから流れてくる思いに在ったのでな。おまえ、カウサリ

サに憧れていたのだろう？　私に取り込まれる土産だ。一つ講義をしよう」
紫音は地獄絵図の作り出していた。どこへ逃げることも叶わず、ただただ化物に食されていく人間達。ある者は指を一本ずつ食われ、やがて腕、やがて胴体へと骨肉を貪られていく。
ある者は両足を持たれ付け根により引き裂かれていく。夥しい量の返り血が紫音を汚すが直ぐに描かれた文様より吸収されていく。そしてより一層輝きを増す文様はまさに人食いの魔術の根源なのだろうか。

「カウサリサとはな。悪魔を己の存在へ取り込み、使役する者だ。ソロモン王の大いなる鍵に記述される七二の柱。その悪魔をな」
紫音はいくら人の肉を食らっても飽きることも留まることもなく、次々に惨殺しその肉体を咀嚼していた。
ややして紫音はひとつの人の群れを見つける。周囲の男を両手を振るい殺さずに退かすと、中央で泣き叫んでいた『妊婦』が居るのを識る。

「今彼女は目は見えていないが、ここに居る人間全ての視界へ介入し世界全てを見ている。だからこそあの様に動けるしすべての挙動を識ることが出来る。
悪魔とはそう。その存在自体が魔術的に完成しているのだ。今の貴様が『無駄すぎる無駄の無い魔術構成』を紡げるように。
だが彼女は私ほど柱の業を扱うことに長けてはいないのでな。半ば強制的に開かせる他ないのだ」
そしてその風景はデレクへも同調される。そうして識るのだ。だから彼は声を漏らす。

「美味しそうだ――」
シオンは衝動に身を任せその膨れた腹へ腕を穿つ。

「いぎぃ」
子を宿した女が顔を歪める。腹を抉られるまでシオンの接近に気がつくことは無かったのだ。そして欲望のままに動く彼女は穴を開けた肉へ両手をそえ、一気に広げる！
女の声が響く。それはなんの悲鳴か。自分の腹が裂かれた悲鳴か、それとも露わになった子宮の中で胎動する命が、これより食されるであろうことへの悲鳴か。どちらとも取れないその声は途切れず続く。
紫音は興奮のあまり股より黄色い液体を流すが何一つ気にすることはなく、露出した子宮へ手を添え、一気に引き抜き切り裂く。
周囲へ血とはまた違った液体が飛散する。それは羊水と呼ばれる液体であったが直ぐに血と混じり紫音へ吸収される。そして破った袋の中にあった胎児をゆっくりと掴み上げ、首を捻り切る。
叫び声一つあげないその胎児の顔を両手で持つため、臍の緒で繋がれた身体はその場に落とす。落ちた身体へと瀕死の母親がにじり寄るが、それを紫音は母親の頭を踏みつぶす事で阻止してしまう。
両手で持った胎児の頭を万力の様に圧迫しはじめる。やがていよいよ破裂するといったところで紫音は大きく口をあけ、その上へ頭を持って行き、押しつぶした。
「生を、授かりかけた存在の味だ。なんて――」
デレクが同調した味覚を通じて、感嘆の声を上げる。
「なんて美味しい」
血とも脳漿とも言えない液体が両手より流れ紫音はそれを飲み下していた。
「人間の肉は、若くより混じりけの無い肉である方が美味でな。あの様に純粋に栄養を送り込まれていた胎児は、この様に甘美な味

がする。貴様にも分けられないのが残念だが。まあ何、気にすることはない。すぐ俺の中で感じることになるだろうよ」
いよいよ閉じた世界に残ったのは五人となった。デレク、紫音、男、アシュリー、そして彼のメイド。
ブロンズの髪を纏め上げ、コントラストの聞いた給仕服を着ていたメイドは、気丈に主人をかばう様に立っていた。それにわざわざ歩み寄るシオン。一歩ずつ近寄るその姿に彼のメイドはいよいよ崩れ落ちる。泣きながら小便を漏らし、助けを乞う。

「助けてください……お願いします……うくっ」
アシュリーはそのメイドの姿を見て一歩二歩を後ろへ下がる。が、すぐ背後が閉じた壁に阻まれて顔を歪める。

「駄目だ」
シオンは感情を込めることもなくそのメイドの両目を穿つ。叫びを上げる瞬間にあわせて喉を蹴り上げ首の骨を折る。そして弛緩する胴体と首とを持ち、外側へ目一杯に引きちぎり首を切り離す。既に漏らしていた黄色い液体に続きメイドの股から黒く悪臭を漂わせる半固体も流れ出る。
思い出したように持っていた胴体の心臓の周囲を貫き、僅かに胎動する心臓を握る。シオンはただただ日常の動作の如く、その心臓をメイド身体より引き抜きすぐに潰す。生命最後の輝きが紫音の身体を濡らして直ぐ様文様へと吸収される。
いよいよ最後に残ったアシュリーが絶叫する。

09．虚証

「お、お前たちは一体なんなんだ！　なぜ、なぜ殺す！」
シオンが、デレクが同時に笑みを零す。
「「欲望という言葉を知っているか」」
一瞬、アシュリーは不可解な言葉を聞いたかの様に顔を上げ、確かに『欲望』という言葉を解釈した瞬間に気が狂ったように声を荒げる。
「お、お前たちは殺すことが！　喰らうことが望みだとでも言うのか！」
「私は殺す事が。輝ける命を美しく散る瞬間、その生命の爆発を」
デレクが答える。
「私は喰らう事が。輝ける命の甘美なる舌への刺激を」
シオンが答える。
「「ならばこそ我らは殺し喰らう者なり。それが我らが共に在る契約」」
二人の声が重なり、中庭の大気全体が震える。
「さあ、我が盟友アシュリーよ。君の命を輝かせてくれ」
シオンは一歩下がり、デレクが一歩前へ進む。更に一歩、少しずつ後退していくシオンとその代わりに前進していくデレク。
「く、来るな！　来るんじゃない！　この気が狂った奴め！　貴様なぞをここに呼ぶのではなかった！　来るな！」
恐怖が絶望が怒りがあるとあらゆる感情が彼の中で爆発する。

次々とアシュリーの口から紡がれる呪詛にも似た言葉は、デレクにとっては子守唄か、否、彼にとってはこの呪詛や悲鳴こそが最高のオーケストラなのだ。

「良い。良いぞアシュリー。お前は今『生きている』」

一歩進むごとにデレクの顔は笑みが溢れてくる。その感情はシオンにも流れ、彼女の身体を震わせる。

「かつてシオンがアレほど完成に近づいたことがあっただろうか。良い機会だ、君という観衆も居ることだし彼女がまた一つ業を背負う奇跡的瞬間を見ていきたまえ」

シオンの身体に描かれていた文様が一斉に彼女の身体を離れる。光り輝く魔力で編まれたその紋章は霧散することなく中空に漂う。デレクが右腕を天をつくように掲げる。

「――降りろ」

掌をその言葉と共に握りしめる。と、その輝く魔力の塊が串刺しのままだった柱の男へと纏わり付く。そこから体内へと侵食していく光。

デレクの腕に紡がれた魔術陣が幾重にも成り、超密度の構成を紡ぐ。男が編んでいた様な意味が無い構成ではなく、十重二十重に意味を持った莫大な契約構成。

「ＢＧＹＹＹＹＹ」

異物が侵入する事による悲鳴か、男が声を上げる。やがて続いた悲鳴が止まると男を貫いていた刀の存在が四散する。そのまま中空に取り残された男の身体がゆっくりと上昇を始める。

「我が名はデレク・カウサリサ・ホーベル。世界との契約に従いて抑止を屠る者也。命に誓いを、命に願いを、命に全てを」

中空にある男の身体より光が産まれ、そのまま包みこむ。

「其の名はアサクラシオン。我との契約に従いて魔を喰らい払う者也。命に従い、命を貪り、命が全て」

シオンの閉じられていた両目が開かれ、血が止まる。何かを受け入れるかの様に両腕を広げる。

「我は契約し、其へとその盟約を継がん。契約の名はアロセス。ソロモン王が大いなる鍵に因る抑止の柱。ここに契約を結び、ここに盟約を果たさん――！」

そして中空にあった光は小さく小さく圧縮され、手に収まる程度にまでなる。そのまま紫音へと落下していき、彼女の胸へと沈む。

「――契約完了。盟約批准。どうだ紫音。己に柱を取り込んだ感覚は」

一糸まとわぬ姿で在ることに全く恥じらいを覚えることもなく、自分の両手を見つめる紫音。そのまま腕へ視線は上がりやがてデレクを見据える。

「頭が、割れそうです」

デレクはそれを心配するでもなく破顔する。

「良い。いずれそれも慣れよう。さて、最後だアシュリー。何か残す言葉は」

あまりのも神秘的な一連の流れに目を奪われていた。

「あぐ……き、お前ら悪魔にいずれ罰を与える者が現れよう！その時こそ今まで殺されてきた者たちの怨念と知れ！」

デレクは虚を衝かれたかのように活動を一瞬止めるが、一瞬考えて口を開く。

「罰だと？　お前は何を言っているんだ。そんなもの既に受けている。なるほどやはりお前という人間はつまらない。ならばこそ――」

死ね。それだけ紡ぐとデレクは踵を返す。紫音の横を通るときに小さく何かを伝えるが残された一人の男に聞こえるはずなど無く、ただ残された自分を信じられない様子で見ていた。

「な……なぜ殺さぬ！　なぜ――」

最後まで紡げなかった。自分の周りに発光する何かが発現したということを見た瞬間、全て悟り彼は天を仰いだ。

１０．樹炎

最後の爆風がデレクの背を打つ。紫音は小さな乳房を隠すでもなく男の後につく。中庭の果てで未だに結ばれている絶界へ男が触ると、小さくため息を漏らす。

「全く。本当に潔癖症だな。綻びらしい綻びが無い。アロセスの業がこれほどとは……アレは後でこの絶界を解呪出来たのか……？」

「無理でしょうね。アレにはそんな力有りません」

己に柱を取り込んだ事によって彼の全てを手に入れた紫音は、主人の問に答えると共に、絶界に触れていたデレクの手に自分の小さな手を重ねる。

「同調してください。魔術を強引に解きます」

男は少し驚き、分かった。と小さく答えると目を閉じる。紫音はそれを確認した後に目を閉じ、盟約によって更に太くなった主人とのパスに己の意識を埋没させる。

「流石ご主人様。少しこちらで勝手に魔力を使わせて頂きますがよろしいですか」

「構わぬ。やれ」

意識下で交わされる会話。紫音はそれ以上何も言わずに己の意識を触れた絶界へと伸ばす。

完成している魔術を解くには綻びを見つけ、そこより崩すのが定石とされる。どんなモノにも綻びは存在する。魔術にも同じだ。

だが潔癖症を患う柱、アロセスによって紡がれた絶界は今この世界で唯一完璧な存在なのかもしれない。恐らく厳密には球体を生成し綻びを地面の下にまとめて形成することによって、露出部の完全性を演出しているのだろう。

それを彼らに識ることは出来なかった。紫音が魔術そのものに同

調し干渉をしなければ。
　大地に隠された綻びへと意識の手を伸ばし、それを見つけるとデレクより魔力を借り受け一直線に破壊の構成を鎖の様に連鎖させる。やがて構成の鎖が綻びへとたどり着いた瞬間、大きな音が中庭に響き渡ると同時に世界の壁が打ち崩される。

「流石だな。助かったよ紫音。それでは屋敷に火を放とう」
　ありがとうございます。と紫音は小さく口に出し、少し服を探してまいります、とも続けた。デレクは二つ返事でそれを承諾しゆっくりと魔術の構成を編む。
　デレク自身は魔術の才が有る訳ではない。むしろ彼はリスプとしては中の下だろう。だがその身体には柱が三つも取り込まれている。彼は柱の力を念密に組み合わせ、細分化し発現させることに力を注いだ。故に彼は彼自身の魔術と呼べるモノは極々僅かであったが、周囲のリスプはそれに気がつくことはなく英国の狂気とまで呼ばれる程、彼を敵視し畏怖していた。
　紫音が柱を取り込み、既に実質5柱を手に入れた事による歓喜と愉悦がデレクを奮い立たせていた。それを鎮めるように己に内包されている柱の力を幾重にも構成として纏め上げていく。

「ご主人様。外で落ちあいましょう」
　屋敷の中より女性の声が響き渡る。デレクはそれを聞き遂げ、構成を開放する。中庭にの中心に火炎が灯る。残った人の肉等を食らいながらその炎はだんだんと成長していった。彼はそれを確認することも振り返ることもなく出口へと向かう。
　後には屋敷に燃え移る魔術の炎が残った。

11．概所

出会ったことが運命であるなら、彼女が全てを喰らう者であったこともまた運命であったのだろう。

その真実。その思いを語るに我が言葉は足りぬが、然り。だからこそ私は紡がなくてはならない。

この世界と私との契約。この世界と彼女との契約。その始まりと終わりを描こう。

意味など無い。意味など元よりこの世界に存在しない。それは我々が愚かにも付与し、理解するための虚像に過ぎぬ。

だから、今紡ごう。ちょうど暇を持て余していたのだ。少々付き合ってもらおう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4886z/

72の高貴な下衆達の狂騒曲

2011年12月18日01時48分発行